

「往くところが違う」ことの両面価値性と アンビバレンスに関する臨床心理学的考察

—ライフレビューにおいて亡き妻との信仰の違いが
テーマとなった一男性高齢者の事例から—

林 智 一

I 問題と目的

アメリカの精神医学者 Butler (1963) は、それまで過去への耽溺や認知症と関連づけて否定的に捉えられがちであった高齢者の人生の回顧に心理療法的な効果を見出し、それをライフレビュー (Life Review) と名付けた。死を意識することで活性化するライフレビューは、人生に新たな有意義な意味を付与するという。それによって、人生の否定的側面と肯定的側面の統合が促進され、不安の低減や死の受容といった効果がもたらされる。そして、ライフレビューが適応的に進展した場合には、高齢期に優勢となる心理社会的危機である「自我の統合性 対 絶望」(Erikson, 1963) の危機の解決に向かうという。

なお、自我の統合性とは、自身の人生に意義を見出し、自身の唯一 1 回限りのライフサイクルをそうあらねばならなかったものとして、またどうしても取り替えを許されないものとして受け容れることである。そのような自我の統合性が得られないと、高齢者にとってすでに人生をやり直す時間もなく、残されたものは絶望や

嫌悪感だけになってしまう (Erikson, 1963)。

筆者は、ライフレビューの展開プロセスの解明や、ライフレビューを促進する面接技法の整理・体系化を目指して、心理的に健康な高齢者に対する研究としてのライフレビューを実施してきた (林, 2012; 2016; 2018 など)。研究としてのライフレビューのため、研究協力者の実際の問題や病理を引き出しすぎることがなく、かつ面接プロセスがある程度、展開するよう、回数は 5 回ないし 10 回に定めている。

なお、筆者が行ってきたのは、あらかじめ回顧テーマを設定せず、〈思い出の話を聴かせてください〉ということばで回顧に導入するという方法である。このような非構造的ライフレビューにおいては、回顧に入る前に、インタビュー面接として原家族や現在の家族、生育史などについて聴取する。それによって、ライフレビューでどのような話題を話せば良いのか、ある程度のイメージが形成され、円滑に回顧に移ることができる。

上述の林の一連の研究 (2012; 2016; 2018 など) では、5 回ないし 10 回という面接回数で、ライフレビューが展開し、現実の話題に戻って収束

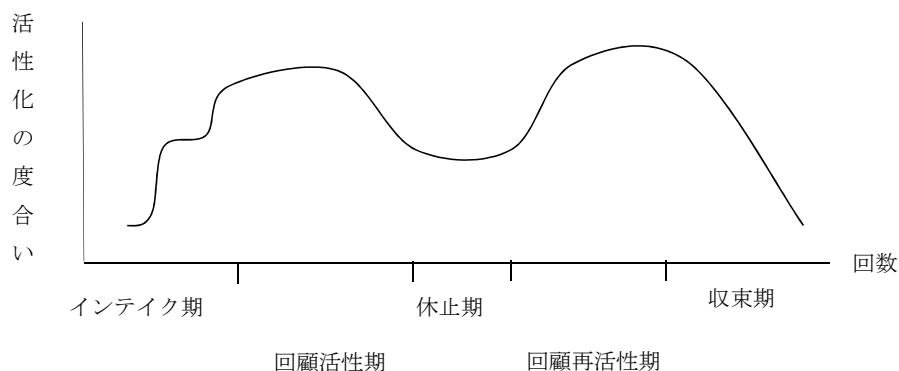


図1 ライフレビュー面接10回法の展開のプロセス(林, 2016)

していくプロセスが見られた。たとえば10回の面接におけるライフレビューのプロセスをイメージ化すると、図1のように5期に分かれる(林, 2016)。図1では、縦軸がライフレビュー活性化の度合いで、横軸が時間経過(面接回数)である。

「インテイク期」は、面接者(聴き手)からの家族歴や生育史に関する質問により、徐々に自発的回顧が見られ出す時期である。その後、回顧の第1のピークが見られる。これが「回顧活性期」である。いったん回顧が減少して現実的话题に戻る中盤の「休止期」を経て、再度、回顧の活性化が第2のピークを迎えるのが「回顧再活性期」である。第2の回顧のピークは、第1のピークよりも回顧の質・量ともに上回っていたのが特徴的であった。そして終盤、回顧が収束して、おおむね肯定的な現状の話題などが語られて面接が締めくくられる「収束期」を迎える。

筆者の行った研究としてのライフレビューの中では、多様なテーマの回顧が見られたが、宗教や信仰に関するテーマも散見された。高齢者が宗教に対して高い関心を有していることは、これまでも指摘されてきた(Markides, 1987)。わが国においても、若年層(16~29歳)、中年層(30~49歳)、高年層(50歳以上)と3群に分けたNHK放送文化研究所の調査において、年齢があがるほど宗教や信仰を信じない人の割合が減り、神か仏かを信じるという人の割合が増えていることから、「高齢になるにしたがい宗

教に好意的・接近的態度を示すこと」がうかがわれるという指摘が見られる(河野, 2011)。

Erikson, Erikson, & Kivnick (1986)は、高齢者の信仰は基本的信頼の問題であり、人生のすべての心理社会的危機の再統合と関係すると述べている。すなわち、高齢者が自身のライフサイクルを肯定的側面と否定的側面を統合して受け容れることで、やがて訪れる死を受容し、安心・安寧の境地で生き続けるためには、信仰がきわめて重要な意味を有すると考えられる。

しかし、信仰を有することの意味は多様であり、また個別的、独自の事象でもある。したがって、容易に敷衍、一般化することは出来ない。“その人にとって”の宗教や信仰の意味を検討していくことが求められよう。

そこで本研究では、ライフレビュー・プロセスの展開を見るために行った、研究としてのライフレビューの中で、ある男性高齢者が宗教や信仰についてどのように語ったのかを事例として提示し、その意味について臨床心理学的考察を加えた。その男性にとっての信仰は、とりわけ妻との死別に関して、両面価値性を有したアンビバレントなものであり、宗教や信仰の意味を考える上で、示唆的であったからである。

ただし、ここで実施したライフレビューは、あくまでライフレビューの展開のプロセスを見るために、筆者から研究協力者を募り、健康な高齢者に対して、回数を定めて、研究として行ったものである。主訴を有し、心理療法を希望して来談したクライアントに対する心理療法

的介入ではない。また、宗教や信仰というテーマも、聴き手である筆者があらかじめ設定して質問したわけではなく、語り手である研究協力者が自発的に語り出したことである。その点に誤解が生じないように、はじめに強調しておきたい。

II 方法

1. 研究協力者

介護老人保健施設デイケアを利用する80歳代はじめの男性高齢者、Aさん。明らかな認知症がなく、疎通性が良好であり、ある程度の言語化能力を有する、心理的に健康であると考えられる65歳以上の利用者を施設より推薦してもらった。その後、筆者から研究趣旨を書面と口頭で説明し、研究協力を承諾を得たうえで面接を行った。

2. 面接場所

上記の介護老人保健施設の面接室を利用し、対面法で面接を行った。

3. ライフレビュー面接10回法

週1回50分、計10回のライフレビュー面接を実施した。ここでいうライフレビュー面接とは、力動的個人心理療法にライフレビューの観点を導入したものである。1回目にはインタビューシートをもとに生育史や家族歴について面接者から尋ねたが、以降は、<思い出の話を聴かせてください>と伝えて面接を開始した。そして、自発的回顧が表れた際に、面接者が積極的関心を示して回顧を促進するという方法をとった。また、ライフレビューであるからと言って過去の話題にのみこだわるのではなく、研究協力者から現在の問題や将来に対する不安、希望など多様な話題が語られた際には、それも傾聴している。

なお、10回に限定したのは、カウンセリングのトレーニング方法のひとつである「試行カウンセリング」(鑑, 1977) のアイデアをもとにしている。試行カウンセリングとは、「カウンセ

リングの本番をカウンセラーとしてやる前に、カウンセリングの本番と同じ事態で、回数を限定して、試みにカウンセラーとして活動してみるということ」であり(鑑, 1977)、具体的には現在、精神的な問題で悩んでいない、健康な人を対象として5回ないし10回のカウンセリングを行う方法を言う。

したがって、10回という回数は、カウンセリングのプロセスが展開し始める最低限の回数であると同時に、心理的に健康な研究協力者から深刻な問題や病理を引き出してしまいう危険性の少ないものである。本研究は、ライフレビューの展開プロセスの研究の一環として行われたものであるため、このような配慮が肝要であった。

III 事例の提示

研究協力者(語り手)の発言を「」、面接者(聴き手)である筆者の発言を<>で示した。なお、プライバシーに配慮し、細部については改変を行った。

1. 事例A

(1) 家族歴・生育史

Aさんは建設業の父と技術を要するサービス業の母のもと、4人同胞の第3子、二男として生まれた。10歳代前半に母が病死し、中学卒業後は母と同じ職業につき、従業員として働いた。父も10歳代中頃に病死した。30歳頃、見合い結婚した。30歳代中頃に独立し、自営業となった。だが、30歳代後半には離婚し、40歳代はじめに見合いで再婚している。再婚後数年で子どもをもうけた。50歳代からは地域奉仕に関わる職務を担うようになり、70歳代中頃まで続けた。70歳代後半、妻が突然、脳卒中で死去した。高齢であることもあって、それを機会にすべての仕事を辞め、娘夫婦の家で同居するようになった。

(2) 事例の経過

#1 子ども時代は遊びも勉強もよくやった。

「まあ楽しかった」。戦争中で、空襲にも遭った。このころ、昔の夢をよくみる。自営業をしていたころの夢で、悪い夢ではない。

2 自営業は朝8時から営業していた。地元の人だけでなく、遠方からのお客さんもいた。＜仕事でたいへんなところはなんでしたか＞。「客あしらい」。相手がどんな人か観察して話さないといけない。趣味は野球を見ること。中学では野球をやっていた。物のない時代で、布で作ったグローブを買って使っていた。お米もじゅうぶん手に入らない時代で、お芋の弁当だったりした。＜仕事を選ぶときに、なにかきっかけはあったんですか＞。姉が母の跡を継いで同じ職業に付いたので、それを手伝ったのがきっかけ。母や姉の仕事を見ていたので、「親方」についてから、怒られることはなかった。当時は夜9時をまわると電気が切れたので、24時間、電気のある警察に行き、勉強した。

3 再婚した妻は他県の出身で、年に1回、お盆に妻の実家に帰っていた。義母の料理が美味しかった。1週間滞在して、海水浴をしたり釣りをしたりした。妻は、集団就職で都会に行き、いろいろな仕事を体験した。それで自分の店でもお客さんに評判が良かった。「(妻は)心の綺麗な人だった」。

4 「親方」の店で働いていたころの夢を見る。親方は昨年、100歳近くで亡くなった。親方は厳しい面もあったが、仕事の後、一緒によその店に(当時は珍しかった)テレビを見に行ったりした(笑)。「小さいときに親を亡くしたらいへんですね」。人付き合いを教えてもらえなかったので、社交が難しかった。＜でも、地域奉仕のお仕事など、人と接するお仕事をされていましてね＞。そうなるまでに苦労した。人とのつきあいの作法とか。

5 地域奉仕の仕事では、嫁と姑の関係など、家の中の話の聴く。そのため、たいへんな

こともあるが、自分の力でうまく解決したこともあった。

6 地域奉仕の仕事で旅行に行ったことが思い出に残っている。自営業の頃は、妻が会計簿記の資格を持っていたので、税の申告を全部、やってもらっていた。以前は、税務署は怖かったが、今はやさしくなった。

7 休業時代は厳しかった。入って3年は、月給150円しかもらえなかった。技術を覚えたらなんぼか給料をくれるようになった。「徒弟制度だから」。徒弟制度は親方や兄弟子、弟弟子との繋がりが濃い。妻は、顔が良いほうだった。心が綺麗で、だまされて品物を買わされることがあった(笑)。人を疑わないから。娘も妻に似ている。やさしくて気がつく。

8 従業員のころ、仲の良いお客さんの家に行き、無料で技術を提供するかわりに、ごはんをよばれたり、お風呂に入れてもらったりしていた(笑)。報酬なしだったが、勉強になるから。娘は妻に似てやさしくて、顔も似ている。妻の料理は美味しかった。しかし、娘の料理はまだまだ。

9 孫娘の中学の入学式があった。孫たちと暮らすようになって1年ちょっと。娘の中学の入学式には行かなかった。地域奉仕の仕事をしていて、時間がなかった。その仕事を自分は20年以上、務めた。定年が70歳代後半。妻と最初に会って、やさしい人だな、と思った。妻は自分とは違う宗教の信者だったが、結婚して自分と同じ宗教になった。「妻は天国に行ったでしょう」。でも、もう会えない。＜どうしてそう思われるんでしょうか＞。宗教によって行くところが違うから。仲の良い夫婦は、一方が亡くなるとすぐに残された方も逝く。

10 <妻が亡くなったときはどんな思いでしたか>。「目の前が真っ暗じゃな」。「まさか妻が先とは思わなかったから」。1人になって娘

夫婦と同居した。以前から、娘は、どちらかが欠けたら面倒をみるつもりだった。このごろ妻の夢をみる。今でもつらい。「何日間かでも介抱していればあれだが、ぼっくり逝ったので」。<心の準備もできなかったんですね>。「でも、本人は苦しまずにすんだのは幸いかも」。やっぱり夫が先に逝くべき。「みんなに迷惑をかけるわな」。<10回、話してみてもどうですか>。「なんか話し足らん」。妻が亡くなって意欲がなくなった。妻の写真を見ていると、夢でもみているんじゃないかと思う。<気持ちが整理されるには時間がかかるんでしょうね>。「10年…(はかかる)」。

2. プロセスとしての事例の理解

面接開始当初は、面接者からの質問に答えるのみで、自発的発言はほとんどなかった。決して面接に対して拒否的ではなく、真剣に考えてはいるが、回答するまでにかかなり時間がかかっていた。

経過とともに、徐々に自発的回顧もみられるようになったが、それでも毎回、話し始めるまでに時間がかかっていた。そこには、妻の死による抑うつや意欲の低下が影響していたようである。精神科の加療などはなかったが、妻の死のショックがAさんから明らかにされたのは、結局、最終回の#10であった。

自営業の話題や地域奉仕の仕事、妻の実家の話題などが語られたが、#3、#4では回顧がやや停滞し、#5以降に再活性化していった印象である。その後はかなり発語量も増えていった。

とりわけ地域奉仕の仕事は、Aさんにとって成功感や達成感、有能感などを再確認できる話題であり、ライフワークであったと思われる。#7頃から、妻の美点や妻と娘が似ていること(#8)など、妻に関する回顧も増えていった。ようやく妻について語る準備ができてきたものと思われた。

Aさんのライフレビューの展開プロセスを、図1に示したライフレビュー面接10回法の展開のプロセス(林, 2016)と比較すると、終盤に

妻との死別のショックという大きなテーマが表れ、それが統合されないままに10回の面接が終了してしまっている。そのため、回顧が収束して、おおむね肯定的な現状の話題などに戻って締めくくる「収束期」が見られなかった。Aさん自身、#10で「なんか話し足らん」と述べているのも、当然の感想であろう。

研究としての面接であるため、10回という回数を延長することはできず、聴き手としては自発的に語られる内容に傾聴するにとどめて、それ以上、内的なものを引き出さずに“覆い”をして収めるほかなかった。さらに、すぐに治療や心理療法が必要なほどにはAさんの心理状態に問題はなく、かつ本格的な治療や心理療法を望むほどにAさんの動機づけが高くなかったということもある。これらの点が研究としてのライフレビューの限界でもあるし、またそのようなことをあらかじめ契約し、含みこんだ構造でもあった。

IV 考察

1. 亡き妻の喪の仕事の遷延

ライフレビューの前半では、主に職業や地域奉仕の仕事を通じた自己の有能感や達成感の確認が見られた。そして後半、亡き妻の「喪の仕事」(Freud, 1917)がメインテーマとなった。

喪の仕事とは、喪失した対象への愛着から離脱するための現実検討の過程のことであり、それによって、また新たな対象を愛することが可能となるような心的プロセスである(Freud, 1917)。Worden (2008)は、喪の過程として4つの課題を示している(表1)。

Aさんの場合、妻の死後、数年を経ても「夢でもみているんじゃないかと思う」ほどに、「喪失の現実を受け容れること」(表1の課題Ⅰ)が困難なようである。また、精神的加療を要するほどではないが、抑うつ的で、意欲が低下している。「悲嘆の苦痛を消化」(表1の課題Ⅱ)することや、「故人のいない世界に適應する」(表1の課題Ⅲ)という課題の渦中にあるようであった。

表1 喪の過程における4つの課題 (Worden, 2008)

課題	各課題の主題	反対の動き
課題Ⅰ	喪失の現実を受け入れる	死が信じられない
課題Ⅱ	悲嘆の苦痛を消化していく	何も感じられない
課題Ⅲ	故人のいない世界に適應する	
	A 外的適應： 故人がいないまま日常生活をやっていく	日常に適應できない
	B 内的適應： 私は何者で、どう生きていくのか —アイデンティティの問い	内的に成長できない
	C スピリチュアルな世界： 「想定された世界」を再構成する	意味を理解できない
課題Ⅳ	新たな人生を歩み始める途上において、故人との永続的な繋がりを見出す	前に向かって進めない

このように、Aさんにとっての喪の仕事は、妻の死後、数年を経ても、いまだ遷延されたままの、解決途上の問題であった。しかし、聴き手である筆者との信頼関係を構築し、面接が安全な場になって初めて語る事が可能となった話題でもあると言えよう。未解決の課題であればこそ、解決を求めて自発的に語られたと考えられる。ただし、あくまで研究のためのライフレビューであるため、いたずらに問題を引き出さず、安全に収束させることも肝要であった。

Aさんの、亡き妻に対する喪の仕事の遷延化の背景には、いくつかの要因が考えられる。ここでは、次の2点を中心に考えてみたい。

まず、Aさんは10歳代という、一般的には早い段階で両親ともに亡くしていることがあげられよう。10歳代であったAさんは、両親との死別をどのように乗り越えていったのだろうか。児童期や思春期に親を亡くすと、子どもは適切なかたちで嘆き悲しむことができず、人生の後になって、抑うつ症状を呈し、成人期に親密な関係を作ることができない場合があると言われる (Worden, 2008)。妻の死後の、Aさんの抑うつや意欲低下が気になる場所である。今回のライフレビューの中では扱うことはできなかったが、実際の心理療法であったならば、重要な焦点の一つである。

次に、亡き妻の死が突然、やってきたことも、喪の仕事を困難にしている一因と思われた。Parks (1975)によれば、事前に予期できない突然死では、悲嘆の営みが困難な場合が多いという。そして、多くの場合、その突然の喪失が現実ではないかのような感覚を抱く (Worden, 2008)。このことは、Aさんの、妻の死に対しての「夢でもみているんじゃないか」(#10)という発言にも表れていよう。

ただ、このような悲嘆の中でも、Aさんは、精神科的加療を要するほどに重篤な状態には陥っていない。おそらく、娘夫婦と同居することでさまざまなサポートも得られていることが、現在のAさんのこころの健康を支えている大きなポイントであると思われる。

亡き妻の面影を宿した娘の存在は、時に妻の死を思い起こさせることもあるかもしれない。その一方、愛妻との間にできた、ただ1人の子どもである娘は、Aさんにとっての思い出の中の幸福な夫婦関係、家族関係の象徴として、機能している面もあるようにうかがわれた。

2. 「往くところが違う」ことをめぐって

(1) 宗教の違いを意識することと悲嘆一負のスパイラルとして—

Aさんは、亡き妻とは宗教が違って、「往く

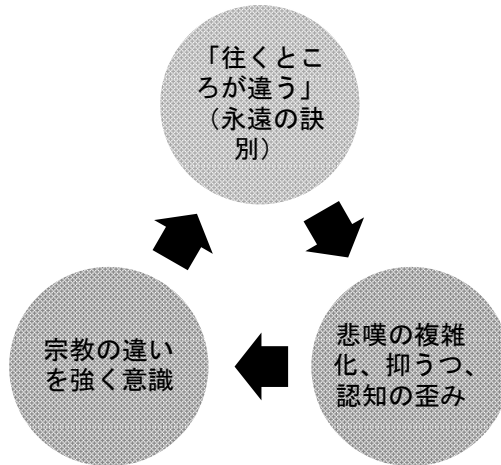


図2 「往くところが違う」ことをめぐる負のスパイラル

ところが違う」と認識していた。そのため、二度と会えないと感じていたことも、喪の仕事の遷延の一因であっただろう。同一の宗教であれば、死後の世界が想定されていて、“死後の再会”などのテーマもありえたかもしれない。“死後の再会”という感覚や認識は、表1に示した喪の過程における4つの課題 (Worden, 2008) のうちの課題ⅢのC (スピリチュアルな世界)、課題Ⅳ (新たな人生を歩み始める途上において、故人との永続的な繋がりを見出す)とも関連しよう。

しかし、「往くところが違う」と考えると、死は永遠の訣別である。それは死別の悲嘆をより深く、複雑にしていたものと推察される。

ところで、Aさんにおいては、ライフレビューを聴く限り、それほどに信仰が篤いと思われるエピソードは語られていない。また、実際のところ、妻も結婚と同時に、Aさんと同じ宗教に改宗しているのである。

悲嘆によって抑うつ的なになればなるほど、Aさんは、それまでそれほど自覚的ではなかった宗教の違いを意識し、「往くところが違う」と悲観的に考えてしまうのであろう。また、妻との再会の不可能性という考えは、さらにAさんの心理状態や認知に大きく影を落とすことになる。このような負のスパイラルが生じていた可能性も推察される (図2)。

なお、「往くところが違う」という考えは、Aさんに抑うつや意欲低下を招くものの、もう一方では、後追い自殺の抑止にもつながるというメリットも有していたのではないだろうか。後追い自殺しても、往くところが違うのであれば、再会はかなわず、無意味だからである。

(2) 宗教の有する両面価値性とアンビバレンス
多くの宗教がその教義に“あの世”、すなわち死後の世界を想定している。宗教の担う不可欠にして最大の責務は、死の不安の軽減であると言われる (松田, 2011)。

また、死への不安を軽減する一つ概念として、「象徴的不死性」について論じた Lifton (1976) は、不死性の感覚には5つの様式 (モード) が存在するとして、その第2に「死後の生という神学的観念、もしくはより重要なものとしては、世俗的生活からもっと高次の存在に解き放たれるという観念」をあげている。それによって「人が死に打ちかつための霊的・精神的力」を手に入れるのである。

したがって、宗教がすべてではないにしても、また特定の宗教への帰依というかたちをとるかどうかは別としても、“宗教”的な観念を持つことは、人が死に向かうときに、大きな力となるものの一つと言うことはできよう。Aさんは、自身の信仰生活のありようや、その意味に

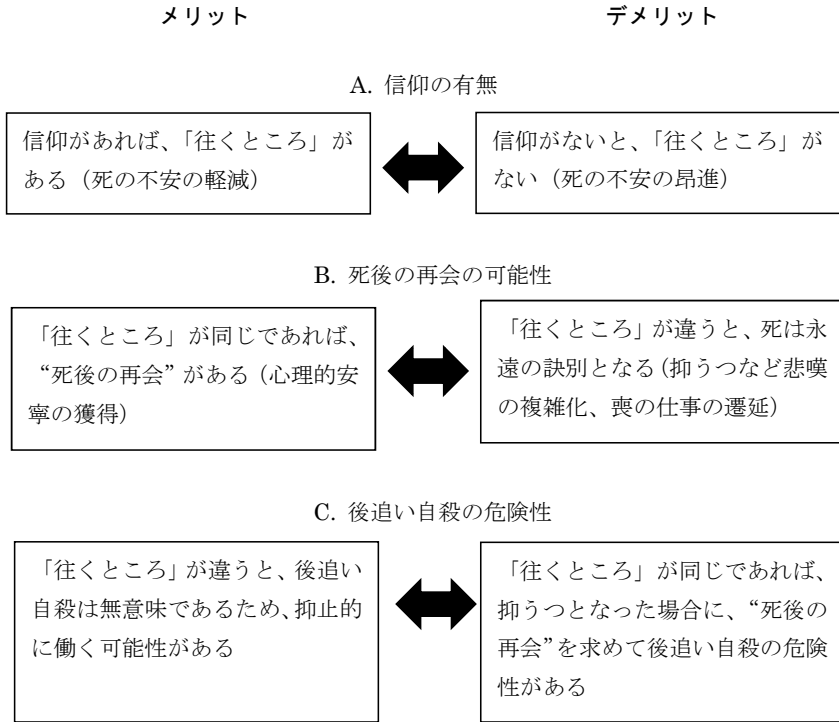


図3 Aさんにおける宗教の有するメリットとデメリット

ついて、明確に述べられなかったが、多くの方がそうであるように、何らかの意味では宗教を必要としていたものと思われる。

ところが、愛する他者との間で、互いの宗教の違いを意識すぎると、「往くところが違う」ことになり、死が永遠の訣別となってしまふ。自己の死への不安は軽減されても、そこに愛する他者がいなければ、本来の意味での心理的安寧は得られないだろう。ここに、信仰の持つ一つのアンビバレンス、あるいはジレンマが存在する。

以上に述べてきた、宗教の有するメリットとデメリットという両面価値性やアンビバレンスを整理したものが図3である。

一神教の欧米などに比して、多神教かつ自然宗教的なわが国では、明確な信仰を意識する人は少ないだろう。宗教の異同の重要性は、日本人には感覚的に分かりづらい面がある。逆に、Aさんのライフレビューに示されたように、日本人にとって、あまりに明確な信仰の自覚には

メリットとデメリットがあり、両面価値的でアンビバレントな面もあるように思われた。

V おわりに

—宗教を臨床心理学するという試み—

本研究での考察は、あくまで一研究協力者個人のライフレビューをもとにしたものであり、宗教や信仰全般、あるいは日本人全般に敷衍できるものではないことを、あらためて記しておきたい。また、文化論的な考察を目指したものでもないし、それは筆者の筆の力のおよぶところでもない。

それでも、アカデミックな世界、とりわけ科学としての心理学や臨床心理学では、一部の数量的調査研究を除いて等閑視されがちな宗教や信仰について、臨床心理学的研究としてチャレンジすることには、相応の意義があろう。

「問題と目的」で述べたように、宗教や信仰という個別的、独自的事象の、その個人にとっ

ての意味にアプローチする際には、臨床心理学における事例研究の視点がきわめて有用であると筆者は考えている。さらに、個を追究することで普遍に至ることもあるというのが、事例研究の意義の根幹をなすものの一つであることも、付け加えておきたい。

筆者は、今後も高齢者に対するライフレビューの研究を継続する予定である。その中で得られた、高齢者にとっての宗教や信仰に関する臨床心理学的、事例研究の知見は、可能な限り研究者間で共有できるものとなるよう、微力ながら発信を続けていきたい。

引用文献

- Butler, R. N. 1963 The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-75.
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society*, 2nd Ed. New York: W. W. Norton. (仁科弥生 (訳) 1977 幼児期と社会 I みすず書房).
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. J. 1986 *Vital Involvement in Old Age*. New York: W. W. Norton. (朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) 1990 老年期—生き生きしたかかわりあい— みすず書房).
- Freud, S. 1917 Trauer und Melancholie. *Internationale Zeitschrift für Ärztliche Psychoanalyse*, 4 (6), 288-301. (井村恒郎 (訳) 1970 悲哀とメランコリー 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) フロイト著作集第6巻 人文書院 pp.137-149).
- 林 智一 2012 公益財団法人 太陽生命厚生財団平成22年度社会福祉事業調査・研究助成報告書 高齢者の昔話りの心理臨床学的検討—ライフレビュー面接モデルの構築に向けて— 大分大学医学部医学科社会心理学講座 全65頁.
- 林 智一 2016 科学研究費助成事業平成24年度～平成27年度研究報告書 ライフレビューはどのようなプロセスで展開するのか—高齢者に対する面接事例から— 大分大学医学部医学科社会心理学講座 全104頁.
- 林 智一 2018 日本心理臨床学会平成28年度研究助成研究成果報告書 高齢者の心理療法におけるライフレビュー・プロセスの検討 香川大学医学部臨床心理学科発達臨床心理学研究室 全35頁.
- 河野由美 2011 中高年と宗教 金子暁嗣 (監修) 宗教心理学概論 ナカニシヤ pp.123-138.
- Lifton, R. J. 1976 *The Life of the Self: Toward a New Psychology*. London: Deborah Rogers. (渡辺 牧・水野節夫 (訳) 1989 現代、死にふれて生きる—精神分析から自己形成パラダイムへ— 有信堂).
- Markides, K. S. 1987 Religion In: G. L. Maddox (Ed.) *The Encyclopedia of Aging*. New York: Springer. (谷川章雄 (訳) 1990 宗教 エイジング大事典刊行委員会 (監訳) エイジング大辞典 早稲田大学出版部 pp. 253-256).
- 松田茶茶 2011 死の不安と宗教 金子暁嗣 (監修) 宗教心理学概論 ナカニシヤ pp. 185-186.
- Parks, C. M. 1975 Determinants of outcome following bereavement. *Omega*, 6, 303-323.
- 鏑幹八郎 1977 試行カウンセリング 誠信書房.
- Worden, J. W. 2008 *Grief Counseling and Grief Therapy: A Handbook for the Mental Health Practitioner*. 4th ed. New York: Springer. (山本 力 (監訳) 2011 悲嘆カウンセリング—臨床実践ハンドブック— 誠信書房).

【付記】

本研究は、科研費基盤研究 (C) 17K04424『高齢者のライフレビューが生起するとき—奏功機序の解明と技法論の構築に向けて—』(研究代表: 林 智 一) によるものです。私のように1人で、かつ未開拓の領域の研究を行っている者にとって、研究助成を賜ることは、自身の研究の意義が社会的に認められたようでもあり、おおいに励みとなっております。

研究にご協力いただきました高齢者のみなさまに深謝いたします。Aさんからは、配偶者を喪うことの“痛み”と“悼み”について、たくさんのお話を教えていただきました。必ずや今後、同じ体験をされた高齢者のみなさまの“こころ”のケアに役立つ時が来るものと信じております。

また、本研究の一部は、令和元 (2019) 年の中国四国心理学会第75回大会 (香川大学教育学

部)にて発表させていただきました。その際に、ご自身が信仰をお持ちの先生方を中心に、宗教や信仰をめぐって貴重なコメントを賜りました。宗教について門外漢の私にとっては、たいへんありがたく、また研究を後押ししていただけたようにも思われ、心強く感じました。私自身にとりまして、宗教や信仰に関して発言、発表することは、大きなチャレンジであったことを、率直に記しておきたいと思います。

最後になりましたが、宗教の違いの自覚と抑うつの中の「負のスパイラル」に関する考察は、近畿大学工学部の有馬比呂志先生のご教示をもとにしております。そのことをここに記して、謝辞に代えさせていただきます。